

神と獣の間 : Free Fallにみる人間像

吉村, 治郎

<https://doi.org/10.15017/2332621>

出版情報 : 文學研究. 84, pp.27-45, 1987-02-28. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

神 と 獣 の 間

— *Free Fall* にみる人間像 —

吉 村 治 郎

I

「泉のように澄んだ少年」⁽¹⁾ が成長するに従って「淀んだ池の水のような大人」(p. 9) へと転落してゆく。自分はいつ、どこで、そして、どのようにして子供時代の無垢を喪失したのか。*Free Fall* の主人公 Samuel Mountjoy はそうした己れの転落の原点を求めて自らの過去の軌跡を辿ろうとする。*Free Fall* はこのように画家サミュエルの自己探求の形をとった自伝的告白録として書かれており、その点でジョイスの『若き芸術家の肖像』としばしば比較されるのであるが、その叙述の仕方は一風変っている。普通の自伝のように過去のある時点から現在までを時間を追って物語るという編年体の形をとっていない。様々な体験が主人公の記憶に蘇るままに自由に記されていくという、いわば心理的時間の流れに従った叙述形式になっている。その結果、この小説はサミュエルの様々な心象風景が断片的かつ無秩序に書き込まれたスケッチブックの様相を呈している。つまり *Free Fall* は普通の意味でのプロットの一貫性やストーリー性を意図的に拒否した心象風景の小説として創造されているのである。ところで、こうした小説においてはそこで扱われる事件はその外的トピック性に重点があるのではなく、寧ろ事件そのものの「あらわれ方」の方により重要な意味がこめられていると考えられる⁽²⁾。そこで小論ではとくに一見無関係かのように断片的にあらわれるサミュエルを中心としたいくつかの人間関係の「あらわれ方」や相互関連性に注目するとともに、繰返しあらわれるその

他の事象の照応関係にも着目することによってサミュエルの人間像を探ることとする。その際、第1章から第3章にみられるエデンの園を思わせる楽園設定の意図を考慮に入れながら論を進めていくこととする。即ち、この小説の fable 的構造と心象風景として設定されている二つの特異な点を絶えず念頭に置きつつ、サミュエルの人間像を明確にし、それによってゴールディングの人間観を探ることをこの小論の目的とする。

II

Free Fall の序章ともいえる最初の三章の共通点はサミュエルの幼年時代の無垢が中心に扱われていることである⁽³⁾。ゴールディングはサミュエルの無垢を印象付けるため様々な工夫を施している。それはまず人物配置や場面設定に窺われる。

サミュエルは名前さえはっきりしない母親の私生児として生まれるが母親は言葉以前の大地の如き存在として認識されている。一方、彼の姉的存在である Evie はその名の示す通り、Adam とともに人類の一方の始祖である Eve を想起させる⁽⁴⁾。また、この頃のサミュエルの目を通して描かれる学校教師はどれも「先生」とは書かれず「木」に喩えられている。これは彼が自意識を持つ以前の自他の区別も未分化な状態にいることを示す。いいかえれば、社会意識に目覚める以前の無垢の状態にあることの暗示である。サミュエルを取りまく環境はこのように大地があり、木があり、イヴが住んでいる。此処はまさしく墮落以前のアダムとイヴの住んでいた楽園に他ならず、サミュエルとはとりもなおさずアダムとして想定されていることは確かである。

しかし、これだけにとどまらない。ゴールディングは人的状況設定から一歩進んで外界の事物に対するサミュエルの反応の仕方を通して無垢の本質を明らかにしている。例えば、将軍の邸内でのエピソードはその好例である。

好奇心旺盛なサミュエルは Johnny とともに塀の崩れた一角から将軍の庭

園へと忍び込む。庭内には煌々と輝やく月の光が一面に降り注いでいる。二人は「闇の中に腰までつかった」(p. 44)り、また全身はまり込んだりしながら青い月の庭園を探索するが、そこで目にする一本の大きな木は「後年ならばヒマラヤ杉と呼んでやり過ぎた筈であるが、その時には一つの啓示であった」(p. 46)。しかも二人はその時「楽園をさまよう二点の知覚」(p. 45)と化し「目そのもの」(p. 45)となる。この場面設定自体エデンの園の縮図になっているのであるが⁽⁵⁾、全身知覚と化し、木を何かの「啓示」と受けとめる感じ方は無垢の本質を端的にあらわしている。無垢とは外界の事物との直接的関係の中に生きている状態をいうからである。サミュエルはまさしく今その状態にある。これに対し、「ヒマラヤ杉」という一つの固定概念として木を知覚するやり方は事物の間接的把握を意味する⁽⁶⁾。これはいうまでもなく大人の感じ方である。従って無垢を喪失し、大人の経験の世界へ入って行く過程とは、外界との啓示的または直接的関係から追放され、概念的または間接的関係へと移行することに他ならない。

サミュエルを取り巻く楽園設定に目を向け無垢の本質の一端を検討したのであるが、サミュエルの「無垢の歌」ともいえる最初の三章は決して肯定的光ばかりが溢れている訳ではない。エデンの園を思わせる夜の庭園で無垢の最中であつた時でさえサミュエルはすでに「闇の中に腰までつかって」いたとあるように、ゴールドィングは巧妙に暗い否定的要素を用意することを忘れてはいない。いくつか他の例を見てみよう。

まずサミュエルがアダムとして楽園設定の中に置かれていることに今一度注意したい。彼は確かにその時点では無垢な存在としてのアダムではある。しかし、聖書中のアダムがやがて転落していったと同じく彼も現代のアダムとならないという保障はない。先程とりあげた將軍の庭園で彼が殊更目をとめた一本の木もアダム転落の引き金となった、あの「知恵の木」であつたかも知れないのである。楽園設定は一方でサミュエルの無垢を印象付ける効果も持つが、他方アダムの辿った転落の危険を思わせて暗示的である。

さらに、無垢な子供のサミュエルには楽園と思われている Rotten Row も客観的にみればその名の示す通りただの貧民窟にすぎない。そこで繰返し意識されている厠や排泄物は無垢の楽園における今一つの不安材料となっている。最後にサミュエルを取り巻く二人の幼な友達ジョニーと Philip に目を転じてみたい。

飛行機好きのジョニーは飛行機みたさにサミュエルを誘って入構禁止の飛行場へこっそり入り込んだり、将軍の庭園へ忍び込んだりする冒険好きな少年である。また腕力にかけてはひけをとらない彼はサミュエルにとっては喧嘩の好敵手ともなる。そして実際、腕力を頼りによく争いを繰り返す乱暴な餓飢大将であるが、反面、サミュエルが後年述懐する通り「生来の善良さと寛容さ」(pp. 190-91)を兼ね備えていたために、たとえ罪を犯したとしてもそれは単に他意のない落度としてとどまり、陰湿な罪深いものにはならない、という天性の美德の持ち主である。

一方、今一人の幼な友達フィリップはジョニーとは性格的に対極にある。ジョニーが、乱暴な中にもふっきれた明るい単純さ、善良さを持ついわば陽性な子供であるのに対して、フィリップは闇に住む蛇のような陰性な性格をみせる。彼は病弱な身体をしていたせいもあり暴力を前にすると身がすくむのがしばしばで、そのために度々みんなから苛めの手近かな標的にされ、慰みにちょっと蹴とばされたり首をしめられたりする。一方、逃げだすことはあっても抵抗は一切しなかったので苛める側も拍子抜けすることがしばしばである。勿論、フィリップとしては生半可な抵抗は却って苛めに油を注ぐことを恐れてとった自衛手段ではあった。しかし、こうした弱腰の態度が災いしてみんなから馬鹿にされ軽蔑され、最後は仲間外れにもされる。一見彼は気の毒な犠牲者にみえる。ところが、彼は殴られたり蹴られたりするのが自分でさえなければ喧嘩が大好きな子供であった。サミュエルとジョニーの喧嘩が起こるやすぐ現場に急行することは勿論のこと、集団でもみあうような時には、にやにやしなからその回りをまわり、どさくさに紛れて一番弱そうなのを蹴りつけたりもす

る。サミュエルが評している通り、彼は本当の所は「苦痛を与えることを好み破局は彼のオルガスムであった」（p. 48）。とても犠牲者として同情されるべき子供とはいえない。しかし、彼の本領はなんといっても子供離れした大人顔負けの恐るべきそのマキャヴェリ性にある。

フィリップに唆されて起こしたタバコ・カード強奪事件や喧嘩のためサミュエルは一時孤立した境遇にあったが、その境遇をすかさず利用して近づき、唯一の友人であり家来であるかのように彼にとり入り感謝と信用を勝ちとるといふ、機をみるに抜け目ないやり口は勿論のこと、サミュエルの心理を巧みに操ることにより聖壇に放尿させようと仕向ける彼の権謀術策ぶりはまさに生き馬の目を抜くが如き策士のそれといえる。「君は学校中の子供は誰だって殴り倒せるだろう」（p. 59）ともちあげて、腕力に自信のあるサミュエルの自負心を巧みに煽る。が、間髪を入れず、「だが、このことは、これは君だってやるまい、やる勇気があるまい——まじめにいうが、サミーやらない方がよい」（p. 59）とやって一見相手の為を思ってとめる素振り装いながらも、やる勇気があるまいと言われればやらざるを得ない人間心理の弱点ともいうべき天邪鬼な性質を巧みに突いて挑発する。こうして、完全にサミュエルを掌中におさめたとみてとるや、彼は内心「恐るべき事が起こるといふ見込みに忍び笑いし、ぞくぞくしながら両手を打って」（p. 59）喜ぶ。彼はこのように子供とはいえ既に「人間について知って」（p. 49）いる油断のならない危険な子供である。いわば楽園における蛇の如き狡猾な存在ともいえる。やがて彼はそうした狡智の才を、うってつけの政治の世界で大いに発揮して國務大臣にまで上りつめるというしたたかな生き方をする。一方、飛行機がなによりも好きだったジョニーは戦争と同時に空軍入りし故郷の上空であっけなく戦死する。善良で生一本な彼の性格にふさわしいといえばふさわしい屈托のない死に方といえる。

以上、場面設定と人間関係の二つの面からサミュエルの幼年時代をみてきたが、いずれも光と闇という二律背反的な設定になっていることは注意を要する。つまり楽園の中には既に生殖器や肉欲に連なる尿や糞があり⁷⁾、善良なジ

ヨニイの傍らには狡猾なフィリップがいた。またサミュエルが庭園で目にとめた一本の木も、アダム転落の原因となったあの「知恵の木」となる危険も孕んでいた。尿は生殖器や性欲に、フィリップの狡智は大人の狡さに、「知恵の木」は知識と認識に通ずるとすればこれら三つの要素は大人の経験の世界に特有なものばかりだということになる。楽園と思われていた無垢の世界に既にそれと気付かれず経験の世界が混在していたことになる。そして、*Free Fall* が画家サミュエルの心象風景的回想録として設定されていたことを考えれば、これら三つの要素は単に外的なものではなく、とりもなおさずサミュエル自身の内面を映し出す印たり得るということである。実際これら三つの要素が彼の中に存在していたことが後の Beatrice や Halde との出会いによって検証されることになる。これに関しては次の章で述べる。

ゴールドディングは最初に謎めいた暗示を提出しておき、やがて後でそれらの意味を暗示的に示すという手法を常套手段とするが、上にあげた三つの暗示的要素もそれにならうものである。

III

性に目覚め善悪と自我の意識を持つ青年としてサミュエルが登場する4章から8章までは彼の「経験の歌」としてまとめてよいであろう。以下、サミュエルが経験の世界で交渉を持つ二人の重要な人物ビアトリスとハルデ博士との人間関係を探り、それが先に検討したサミュエルの無垢の時代とどのような繋りを持っているのか考察する。

ビアトリスは教員養成所に通う清純無垢な女学生である。「天国の不滅の朝の輝き」(p. 232) とも思われる彼女の清純な美しさと清らかで豊かなその肉体的魅力の虜となったサミュエルはなんとか彼女を自分のものにしたいと考える。その為にはまず知り合いになることが必要と考えた彼は一計を案じる。それは授業を終えた彼女が帰宅のため養成所の門を出るその時を見計らって、そ

の前を偶然を装って通りかかることであった。しかも、一度はその前を何も気付かぬふりをしてわざわざ通り過ぎる真似をした後、改めてピアトリスをふり返るといふ念の入ったものだった。そして首尾よくきっかけをつくった彼は当初の手筈通り、彼女をライオンズという軽食喫茶に誘いそこで巧妙に口説く。「ぼくはあなたの祭壇、あなたの友達、あなたの思想、あなたの世界が欲しい。ぼくは嫉妬に狂っているからあなたに触れる空気を殺してやりたい」（p. 84）といかにも恋に狂った言葉を吐き、相手に巧妙に媚びると同時に自分の情熱の真剣さを訴える。その一方で「ぼくを助けてください。ぼくは気が狂ったのです。哀れと思って下さい。ぼくはあなたになりたいのです」（p. 84）とありったけの哀願をして、相手の同情心を誘おうとする。心根の優しいピアトリスはこれに一番心を動かさるのである。彼はそれを十分承知の上だ。そして告白後の別れ際には、「一人のよく気のつく、おもしろい愉快な青年」（p. 84）を「目立つように押し出し」（p. 84）て相手の歓心を買うための最後の仕上げをする。しかも「計画的につくった」（p. 84）と彼が述べているようにこれらすべて予めつくった筋書き通りに演じたものである。恋は彼を詩人とはせず、寧ろ恐ろしく抜目のない小悪魔的策士たらしめたのである。一方、生来「不誠実の酬いをいまだ受けたことがない」（p. 87）純真かつ無垢なピアトリスはサミュエルのかくされた底意など疑うことなど思いもよらない。無防備な彼女は彼の言葉そのままを素直に受けとる。やがて彼女はサミュエルの巧妙かつ執拗な哀願と拝み倒しに屈して結婚の約束までさせられるばかりか、純潔を彼に捧げることとなる。その後彼は度重なる情事によって彼女の若い肉体を堪能し願望を果すが、彼女が皮肉なことに不感症のせいもあって、また Taffy という別の女との関係もできたので、彼女に対する愛も興味も急速に失い、遂には見棄てる。すでに妊娠していたピアトリスはその後精神の異常をきたす。

外見的にみればこの愛の顛末は決して特異なものでも目新しいものでもない。一見サミュエルのシュトルム・ウント・ドランクを物語る一つの平凡なエピソードとして片付けられるかも知れない。しかし、この *Free Fall* の特異性

を考え合せれば一見平凡と思われていた事件の顛末も別の意味を帯びてくる。語り手でもあるサミュエルが述べているように、心象風景として設定されたこの回想録では事件の「あらわれ方」が重要なのであって事件のトピック性は二の次である。今、この「あらわれ方」に注意してみるならば、情事の顛末にみる Samuel-Beatrice の関係は先に「無垢の歌」でとりあげた Philip-Samuel の関係と平行関係にあることがわかる。Philip-Samuel の関係では子供離れした狡猾さを持つフィリップによって無垢なサミュエルは思うままに操られ教会の聖壇に放尿するよう仕向けられる。一方、Samuel-Beatrice の関係ではピアトリスは先に見た通り、哀願となしくずしを折り混ぜたサミュエルのいわば相手の反応を予め予定した作為的な権謀術策によって奔弄され破滅してゆく。このように無垢が狡猾によって奔弄されるという点が二組の人間関係の共通点である。そして注意すべきは嘗てフィリップがやったと同じことを今度はサミュエルが彼女に対して行っていることである。子供時代の回想の中でサミュエルはフィリップの恐るべき狡猾をとりあげて「彼はああも卑怯で、ああも危険で、ああも手の込んだ策士だったのか」(p. 53) と述懐する。しかし、皮肉なことに今やサミュエルはあの楽園にひそむ蛇の如き狡猾さと陰険さを持った策士フィリップとなってピアトリスを弄び破滅させるのである。しかも「無垢なるものに対する危害は許されない」(p. 75) と嘗て述べたサミュエルその人がその許されない罪の担い手に墮しているのである。

以上のことから解るように Samuel-Beatrice の関係は幼年時代の Philip-Samuel の関係をもう一度繰り返した形になっている。しかも、幼年時代の被害者サミュエルは今度は一転してピアトリスに対する加害者となっている。嘗ての被害者が転じて加害者となるという設定は単に人生の皮肉な巡り合わせのみを意味するのでは勿論ない。ピアトリスに対する性欲を介在として図らずも露呈したフィリップ的な罪深い気質は単に性に悩む青年期に特有なその場限りの一過性のものではなく、溯って、無垢の真只中にあった筈の幼年時代のサミュエルの中に既にその根があったのではないかという恐るべき原罪性を暗示し

ている。ピアトリスに対する仕打ちは彼本来の罪深さの一つのあらわれにすぎず、彼は実は蛇の如き賢さと陰険さを持ったフィリップと同じ血を分つ兄弟であったことを示唆する不気味な暗示なのである。このことは彼が後年、自ら棄てたピアトリスを精神病院に訪ねた時、そうした己れの原罪性をはっきり認めて、“Guilt comes before the crime and can cause it. My claims to evil were Byronic” (p. 232) と述懐していることから明らかであろう。また人間の根源的本能である性欲に悪が胚胎していたという設定も悪の根深さ、肉欲の罪深さを印象付けるものである。が、ともかくサミュエルの無垢の時代にフィリップの狡猾さや、肉欲に通ずる尿の思い出が記憶に残っていたことの意味がここで明らかになったのである。フィリップの姿と尿は実は他でもない己れの後年の姿を投影するものだったのである。

次にもう一つの注目すべき対人関係 Halde-Samuel をとりあげる。

サミュエルは戦時中一時ナチの捕虜となって収容所に入れられる。その間脱走者も多く、困った収容所側はサミュエルが脱走に一枚かんでいるとみて取り調べ、なんとか秘密を聞き出そうとする。その時、取調べの任に当たったのがハルデ博士である。殺人を伴う反道徳的な戦争も国家間でやれば正当化されるとして、「目的は手段を正当化する」(p. 140) と主張する彼の信念からも窺われるように彼は臨機応変に物事を割り切ることのできる、社会知に長けた合理主義者である。ダンテのようにピアトリスとの愛の世界にも生きることができず、そうかといって徹底した冷たい合理一点張りの人間にもなれないサミュエルとは違って、ハルデはなに者かになりきった、それだけに機械的強さを発揮できる人物といえる。

一方、彼は心理学者でもあったので取調べは微に入り細に入り巧妙を極める。最初は世間話という搦手から始め、時には脅迫を織り交ぜ執拗に尋問する。しかし、彼は肝腎な事は何一つサミュエルから聞き出すことができない。サミュエルが口を割らなかつたからではない。彼は脱走計画について全く関与はしておらず本当に「何も知らなかつた」からである。しかしハルデは信じな

い。しらを切っていると考えるからだが、こうしてサミュエルが「何も知らない」といって真実を繰り返せば繰り返すほど相手は疑いと誤解を深め、取り調べは執拗になる。寧ろ彼は適当な嘘を思いつけば信頼されたかも知れない。しかし、頑固に知らぬ事は答えられぬと主張する。到底かみ合う議論ではないのだが、業を煮やしたハルデは彼を真暗な独房に入れるよう命ずる。暗闇に閉じこめたのはサミュエルが画家であることを計算に入れた策略である。なによりも視覚を頼りとする画家にとって光を奪うことは最も厳しい拷問となるからだ。

これで解る通り Halde-Samuel の関係は糾問者と被糾問者の関係として捉えることができる⁽⁸⁾。そしてここで注意すべきはハルデが答えられない質問をそれと知らず執拗に発する糾問者であるということだ。一方、サミュエルは解答不能な質問に困惑しきった被糾問者であることだ。こうした二人の関係はいうまでもなく Samuel-Beatrice のそれに相当する。愛の糾問者サミュエルはビアトリスに「あなたになったら一体どういう気持がするのだろうか」(p. 103) と問う。困ったビアトリスは「ただ普通よ」(p. 104) と答えるが、勿論他にどうとも答えようのない質問である。しかし、彼は委細構わず続ける。「誰かの宇宙の中心を占めやわらかで美しく甘美であり、生まれながらに端正であり清潔であり」「両の乳房の盛りあがり、谷間、細い腰への降下を身に感じ、攻めやすくも難攻不落であるということは どういう気持がするのだろうか」(p. 104)。ビアトリスが神秘的な存在にみえるのは恋の魔術のためでもあるのだが、それ以前にサミュエルは本来「苦しいまでに発見と確認を求めてやまぬ」(p. 103) 気質の持ち主である。上の引用に続く、同じくビアトリスに対する次の質問の山はそうした小ファウスト的な知の追求者としての彼の気質を例証する。

Do you know and feel how hollow your belly is? What is it like to be frightened of mice? What is it like to be wary and serene,

protected and peaceful? How does a man seem to you? Is he clothed, always, jacketed and trousered, is he castrated like the plaster casts in the art room? (p. 104)

以下同様の質問の山が築かれるのであるが、ここにみられるのは絶対糾問者または知の追求者としてのサミュエルの姿である。しかし、先にとりあげたもう一人のより徹底した糾問者であり、同じく知の追求者であるハルデ博士の登場によってサミュエルの姿はハルデの雛型的傾向を帯びてくることになる。いいかえればピアトリスに不可解な質問を浴びせて困らせる小糾問者サミュエルは収容所で彼を執拗に尋問する大糾問者ハルデ博士の若き日の姿であり、逆にいえば、ハルデ博士は後年のサミュエルの成れの果ての姿ともいえよう。

ではハルデ博士とサミュエルとの一致は何を意味するのであろうか。今一度ハルデ博士がその肩書の示す通り学者あることを考えれば、糾問者ハルデは言うまでもなく知の追求者といいかえることができる。サミュエルもまた「苦しいまでに発見と確認を求めてやまぬ」小ファウストであった。そして、ここでアダム楽園喪失には「知恵の木の実」を食べるという知の追求への衝動が絡んでいたことを考えれば、ハルデ、サミュエルは紛れもなく転落者アダムの血を引く者といえるだろう。こうして、ハルデの登場を俟って初めて、ピアトリスを困らせていたその時既にサミュエルのうちには転落者アダムの呪われた血が流れていた事実が確認されるのである。またサミュエルが幼年時代、楽園中のアダム的存在として設定されていたことと相俟って青年時代のサミュエルと聖書中のアダムとの一体化が成立し、知を追求してやまぬサミュエルの血は転落者アダムのそれと似て原罪的な根深いものとなる。おそらくゴールディングがサミュエルを楽園の中にアダムとして置き、しかも彼に將軍の庭園で一本の「知恵の木」とも思われる木に目を向けさせたのもそのような意図があったと思われる。

が、ともかく、糾問する者と糾問される者という Samuel-Beatrice の関係を今度はハルデを糾問者として逆にサミュエルを糾問されるピアトリスの立場

に置いて繰返した Halde-Samuel の関係は、 サミュエルがハルデと同質であることをサミュエルの若き日に立帰って暗示し、更に溯って、幼年時代のサミュエルの中に既にアダム転落の引き金となった知への追求の萌芽があったことを暗示するというフラッシュ・バックの機能を果している。

IV

サミュエルの正式の名は Samuel Mountjoy であるが、この名は小説のタイトルと同じく二律背反的組合せになっている。V. Tiger の指摘にあるように、Samuel とは聖書中の予言者と同名であるからその名は禁欲、敬虔、精神などの肯定的概念を象徴すると解釈してよい。一方、Mountjoy は “mount-into-joy” の意味だから、これは Samuel という名とは反対に快楽、官能などの否定的概念を含蓄する⁽⁹⁾。禁欲と快楽という対立関係はさらに精神と肉体、善と悪、天上性と地上性、美と醜、神聖と穢れ、神性と獣性、光と闇、といった種々の二律背反的関係として捉え直すことができるであろうが、こうした二律背反性を表わしているのが Samuel Mountjoy の名前である。今この名前の象徴性に着目して先に論じた彼の精神遍歴の各時代を解釈するならば次のようになるであろう。

まず、幼年時代は彼が無垢の Adam として生きた時代であり Samuel でも Mountjoy でもなかった。勿論、この時代の彼の中には既に天上へと志向する Samuel 的衝動と地上へと志向する Mountjoy 的衝動の二つが胚胎していた。例えばタバコ・カードに描かれたエジプトの王への愛着や、そのカード欲しさにふるう暴力行為にあらわれている。エジプトの王はサミュエルの開眼後再び彼によって言及されることから解るようにそれは一つの精神的価値を示すものであり、一方、暴力は動物性へと通ずるからである。が、ともかく、上に述べた二つの衝動に対しては全く無自覚の状態にあった。つまり無垢の Adam の状態にとどまっていた、それが彼の幼年時代である。

やがて、彼は性の目覚めを迎え青年期に入る。性欲に駆られた彼は清純なビアトリスを破滅させるのであるが、この時代は彼がまだ天上を志向する Samuel でもなく、もはや無垢の Adam でもなく、情熱の赴くまま官能の Mountjoy として専ら生きたバイロンの時代といえよう。

後、彼は天上性と地上性の二層に分裂した己れの真の姿をはっきり自覚して初めて人間として完全な Samuel Mountjoy となるのであるが、この自己開眼をもたらす機縁となるのがナチの収容所における独房での恐怖体験である。この体験を経て彼はまず自分が半身は地上に縛られた不浄な存在であることを身に泌みて味わうことになる。その過程を今暫く追うこととする。

サミュエルは目隠しをされ何処とも知れぬ暗闇に放り込まれる。彼はそこが独房らしいということだけは理解できるが、そこがどのような大きさ、どのような状態になっているのか全く見当がつかない。もしかすればそこには蛇や毒蜘蛛が置かれているかも知れぬ。抜け目のないハルデのやりそうなことだと暗闇の中で考える。邪推を通してサミュエルは用心深くも卑小な己れのハルデの気質を露わにしてゆく。

恐怖に駆られた彼は足を伸ばしたり手探りしたりして独房全体の様子を把握しようとする。それによって自分の置かれた位置を確認し安心を得るためである。しかし、必死の手探りは益々彼の恐怖を拡大するばかりだ。真暗闇で指先に触れるものすべてが彼の妄想や邪推を益々掻き立てるからである。ビアトリスを巧みに籠絡した、あの抜目なく先を読む伶俐さもこの暗闇にあっては何の役にも立たない。却って先を読むその抜目なさが妄想を生み彼を苦しめ恐怖のどん底に突き落とす。そして、その度に抜け目な故の己れの業をいやというほど思い知らされる。動物と違って「知恵の木の実」を口にした人間はこうした場合、却って知的衝動故に必然的に自縄自縛に陥るのである。やがて彼の指先は独房の中央で何か濡れ物に触れる。しかも異臭が立ち昇っている。彼はそれを腐った人肉片だとも疑う。さらには切断された陰茎だとさえ妄想する。これは独房から解放の時、実はただの濡れ雑巾だったと判明するが知る由もない。

彼は終に天井から腐った人肉がぶらさがっているのではないかと身震いする。ここで見落してならないことは濡れ雑巾に触発されて陰茎を妄想することである。図らずも彼は己れの、というよりは人間の肉欲の業を我知らず露顕したといえる。こうして独房の暗闇はサミュエルにとって次第に自己の様々な暗黒面との邂逅の場と化してゆく⁽⁴⁰⁾。そして地上的存在としての汚れをもつ全自己との邂逅が一瞬のうちに果されるのが、彼が恐怖極って“Help me!” (p. 184) と絶叫するその瞬間であったと考えられる。ただの悲鳴ではなく一種の開眼的エピファニーの訪れを告げるそれであることは次の彼の言葉からも明らかだろう。「ぼくが叫んだのは聞いてくれる耳を期待してではなく、閉じたドアと闇と閉じた空を受け容れてであった」(p. 184)。極限的な恐怖を通じて完全な自己放棄、完全な個我の滅却に参入し、自己を無と化したその瞬間に全自己との邂逅が成就したのである。「叫ぶという行為自体が叫んだものを変えた」(p. 184)、「闇が眼球の間近にあるように死が間近にある入口に到達した」(p. 185) と述べる彼の言葉は一種の死による自己開眼を示している。開眼によって自由を獲得した彼はもはや独房から解放されようがされまいが大きな意味はない。従って「収容所長がぼくを闇から出してくれた時は、予備隊が遅れて駆けつけたようなものだ」(p. 186) と感じるのである。

一種の死によって善悪の彼岸へ到達した彼はいわば鱗の落ちた濁りのない澄明な目で外界の事象すべてを眺めることができる。「小屋は創造された本性のままの無垢な光で輝いて見え」(p. 186)、開眼した目は何物にも妨げられることなく眼前の木の本质にも深く参入してゆくことができる。木々は嘗て無垢の時代に眺めた如く何かを啓示する意志そのものと映る。次の光景はそうした彼の境地を示すものといえよう。

I raised my dead eyes, desiring nothing, accepting all things
and giving all created things away. The paper wrappings of
use and language dropped from me. Those crowded shapes ex-

tending up into the air and down into the rich earth, those deeds of far space and deep earth were aflame at the surface and daunting by right of their own natures though a day before I should have disguised them as trees. (p. 186)

木は限りなく遠き空間へ向う天上性を示す一方、その根は深く暗黒の地下へと向う地上性をも合せ持っている。その厳かな二つの意志の権化である木々は神々しいばかりの炎が燃え盛っている。木々はあたかもサミュエルの到達した人間認識を暗示するかのような光景を呈しているが、この後「奇跡のように、聖霊降臨のように一片の火花の訪れを受けた」(p. 188)と彼が言っていることから、ここでおそらく彼は霊的なものを受容する天上的霊性が己れの身内に存在することをはっきり自覚したに違いない。即ち聖書中の聖者 Samuel を己れの身内に自覚したに相違ない。しかし、ここで問題が残る。

確かにサミュエルは「開眼」(“a new mode of knowledge”)を得た、しかしその陰にビアトリスという犠牲があったことを忘れてはならない。開眼すれば過去の罪業が一切消滅するであろうか、それとも開眼が全くの無に帰するのか。答えはサミュエルが病むビアトリスと再会する場面に示されている。

サミュエルはビアトリスを精神病院に訪ねるが、彼女は強度の精神異常のため彼の顔さえ識別できないばかりか、彼の目の前で失禁に及ぶ。嘗ては女神の如く輝やいたビアトリスも今や正常な精神を失い、もはや尿を洩らすだけの動物的肉塊と化しているにすぎない。目を被うばかりの痛ましい光景であるが、この行為は彼女に対する憐憫の情を掻き立てることはもちろんのこと、清純無垢な、それ故、無防備な女性をあやめた悔恨と罪悪感、そしてこのような大きなとりかえしのつかない犠牲を払わねば開眼を得られぬ人間というものの救い難さ、生まれながらの業の深さを彼に思い知らせるものである。先に引用した彼の次の言葉は人間のそうした存在的罪深さをはっきり自覚した悟りの境地を示す。

Guilt comes before the crime and can cause it. My claims to evil were Byronic; (p. 232)

とはいえ「ビアトリスはそっぽを向いたままであった」(“Beatrice looked the other way.” p. 232) とあるように「無垢なる者への危害は許されない」(pp. 74-5)のである。なぜならば「無垢なる者は危害を危害と感じぬものを赦すことができない」(p. 75) からである。しかしそのような回復不能な犠牲の上に獲得された開眼故に無に帰する類いのものでない筈である。従って彼はただ半身は開眼の光に包まれながらも、残る半身は罪の汚辱の闇に沈めたまま立ちつくすしかないのである。栄光と汚れをともにせねばならぬ必然性、それが人間の宿命であり、在りようである。なぜならば、人間は精神性と肉体性、善性と悪性、美と醜、霊性と物質性、聖性と穢れ、そして神性と獣性の闘ぎ合うその狭間に位置する存在だからである。即ち、人間の真の姿を形象化したような半神半獣のあのエジプトのスフィンクスの如き存在、それが人間である。ゴールドディングがサミュエルに語らせる次の言葉はそうした人間認識を示している。

Cause and effect. The law of succession. Statistical probability. The moral order. Sin and remorse. They are all true. Both worlds exist side by side. They meet in me. (p. 244)

それ故、神性を持ちながらも「人間がおのれをたやすくは神と思いませんにいるのは、下腹部のゆえ」⁽⁴¹⁾ であり、獣性を持ちながらもおのれにたやすくは絶望しないでおられるのも神性ゆえである。こうした、決して相容れることのない二つの意志の奇跡的共存である人間とは、まさしくあり得ざる奇跡そのものであり、永劫に解くことのできない不可解な謎そのものといえるであろう。

V

以上みてきた通り *Free Fall* は人間の原罪性をテーマの一つとしているが⁽¹²⁾、それを描出するためにゴールディングはいくつかの工夫を施していた。

第一は幼年時代のサミュエルをエデンの園的楽園の中にアダムとして置くという *fable* 的設定であった。この設定はサミュエルの無垢を聖書中のアダムのそれに高める効果を持つと同時に転落の必然性をも暗示していた。そして後年サミュエルが辿る転落の過程に宗教的重みを持たせる効果もあった。ただし彼は人類的規模に到るほどの人格の大きさは獲得していない。

第二に行為や人間関係の反復の手法がとられていた。類似した行為や人間関係の反復は互いに一方の行為や人間関係の意味を一瞬のうちに照し出す効果があった。たとえば Philip-Samuel の人間関係にみられる、狡智が無垢を奔弄するといった行為形式は後に Samuel-Beatrice の形で反復されるが、この場合はサミュエルが奔弄する側の狡智の立場に回ることによってサミュエルとフィリップの同質性が暴かれサミュエルの持つフィリップ的性格の根深さが暗示された。

第三は清純無垢な無辜の女性がサミュエルの肉欲の餌食となるという設定である。結果的にはサミュエル自身も悲しい肉欲の犠牲者となる訳だが、人間存在に深く根をもつ肉欲に罪を絡めることによって肉欲の罪深さ、ひいては人間の存在的罪深さが示唆された。

こうしたいくつかの工夫によって罪は外からくるのではなく人間存在そのものの中に胚胎しているのだという人間の原罪性が暗示されていた。しかし、そうした罪深さがある一方、天上の光に憧れる衝動もまた人間には備わっているという事実も確認された。即ち人間は罪深い完全な獣でもなく、神性も持つが神ではなく、神性と獣性、天上性と地上性、善性と悪性、聖性と汚穢の闘ぎ合うその狭間に位置するのが他ならぬ人間というものであった。それは天上性

と地上性をそれぞれ表わす Samuel Mountjoy という名前の象徴性によっても明らかにされていた。

そして、ここで見落してならないことは、この小説は主人公サミュエルが思いつくままに己れの過去を書き印し、それを後で改めて眺め直してみた結果、図らずも、思いもよらない恐るべき原罪性が確認されるという形式で書かれていることである。つまり、意識的領域にではなく、無意識的領域に重点を置いた心象風景的小説として創作されていることである。これは知らず知らずのうちに否応なく人間を駆りたててやまない内的衝動の動きを捉え、それによって人間の隠された暗黒の本質を探ろうとする、作者ゴールディングの意図の表われといえる。そして、この手法の背後にはゴールディング独特の人間観が窺われる。つまり、我々がこれが自分だと意識している自分は実は真の自分ではなく、真の自分はそうした意識の届かない識閥の背後にあるということである。この真の自分は通常はモラル意識等によって抑圧されていて気付かれずにいるが、なにかの行為を介在として突然激しく噴出し、一瞬その露わな姿を現わす。ゴールディングは意識化された言動ではなく、識閥から突き上げる衝動的言動を捉えることによって、そうした人間の内なる闇の領域の存在を確かめ、その正体を暴こうとしているのである。

〔注〕

- (1) William Golding, *Free Fall* (1959 ; rpt. London: Faber and Faber, 1979), p. 9. 以下本書からの引用はこの版により、頁数のみ示す。なお翻訳にあたっては小川和夫氏の訳を参考にさせて頂いた。
- (2) この小説がストーリー性やプロットの一貫性に重点をおいたものではなく、むしろそれを意図的に拒否したところに成立していることは語り手のサミュエル自身によって言及されている。

It is a curious story, not so much in the external events which are common enough, but in the way it presents itself to me, the only teller. For time is not to be laid out endlessly like a a row of bricks. That straight line from the first hiccup to the last gasp is a dead thing.

Golding, p. 6.

- (3) 小説中の各章の分類は J. Delbaere-Garant 氏の分類法による。J. Delbaere-Garant, "Time as a Structural Device in Golding's *Free Fall*," *English Studies*, (August 1976), p. 354.
- (4) Arnold Johnston, *Of Earth and Darkness* (Columbia: University of Missouri Press, 1980), p. 61.
- (5) Mark Kinkead-Weekes and Ian Gregor, *William Golding: A Critical Study* (1967; rpt. London: Faber and Faber, 1985), p. 173.
- (6) Mark Kinkead-Weekes はこれを自意識欠如の状態によるとしている。Kinkead-Weekes, p. 173.
- (7) 放尿行為の繰返しが幾度かあらわれるが、O'Donnell はこれをこの小説の物語を進展させる一つのパターンだとみなす。
Patrick O'Donnell, "Journeying to the Center: Time, Pattern, and Transcendence in William Golding's "Free Fall"," *Ariel*, (July 1980), p. 87.
- (8) O'Donnell, p. 87.
- (9) Virginia Tiger, *William Golding: The Dark Fields of Discovery* (1974; rpt. London: Calder & Boyars Ltd., 1976), p. 154.
- (10) Delbaere-Garant, p. 360.
- (11) ニーチェ, 『善悪の彼岸』竹山道雄訳 (東京:新潮社, 1975), p. 141.
- (12) Angus Willson, "Evil in the English Novel," *Kenyon Review*, (March 1967), p. 192.